

塊状の抽象形を磨いて！

—— 触り心地のよい「オブジェ」——



表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：水簸赤粘土
- ・造形要素（色／形／材質）：塊状形／単純化、材質（触り心地）、ほか
- ・表現技法：手びねり、形の抽象化、単純化、研磨、ほか
- ・表現様式：抽象形
- ・表現対象／主題：抽象立体オブジェ／触り心地のよいオブジェを表現者が思考、追究、決定する

写真1 「作品A」 [約 1000℃焼成／無釉]（高さ約 12 cm）

造形発想と表現について

造形を規定する要素に色彩と形態があるが、もうひとつ重要な要素に材質がある。いわゆる、造形の三要素である。

つまり造形表現 (output) とは、造形の三要素を捉える色彩感覚と形態感覚、材質感覚（触覚）など、造形感覚を働かせ、それらの要素を使って表現する活動である。

色彩と形態は視覚を通して、材質は材質感覚（触覚）を通して感受する。もちろん、造形表現は、体全体の感覚（五感／視覚、触覚、聴覚、臭覚、味覚）を働かせてさまざまな情報を受け取り (input)、それらを造形（色彩、形態、材質）的に表現していくことは言うまでもない。

もともと立体表現、陶芸表現は材質や材質感覚の占める割合が大きいですが、ここでは特にそれ

らにこだわった表現を追究する。いわゆる「触り心地」や「握り心地」を発想の切り口に、抽象的な「オブジェ」を表現していく。具象形は視覚的な物の概念イメージが強いが、抽象形は材質的（触覚的）な要素を優先しやすいからである。

「触り心地」を表現するために表面を削ったり、竹べらなどで磨いたりするのに向いている粒子の細かい水簸赤粘土を使った。作品は無釉焼成である。

用具／材料

水簸赤粘土（約 1.5kg）、粘土板、竹べら、なめし革、スプーン、ナイフや彫刻刀、雑巾、新聞紙、ほか

表現のプロセスと内容

●触り心地のよい抽象的な立体形をイメージする

- ・手で触ったり、握ったりすると心地のよい形をイメージする。
 - ・形を単純化し、抽象化して表現する。
 - ・自然の中にあるものの形を借りたり、それらを組み合わせたりするなどしてイメージを広げ、表現する対象を発想していくとわかりやすい。
- 《卵や野菜などは自然の中にある形の最も単純化された、触り心地のよい形であろう。》(写真2)

●イメージに合わせ、表現したいおおよその全体形を表現していく

- ・イメージした形を、実際の触り心地や握った手の感触を確かめながら、全体の形をとらえていく。(写真3)

●触り心地を確かめながら、凹凸などをつけるなどしてイメージに合うように形を整えていく

- ・さまざまな角度から見て、全体の形を整えることが大切である。(写真4)
- ・指を使って窪みやひだを入れることができる。(写真5)



写真2



写真3



写真4



写真5

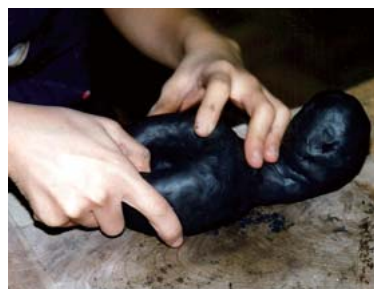


写真6



写真7

《竹べらを使って線彫りするとザラザラした材質感が得られる。》

- ・ドーナツ状に穴をあけるようなことも一つの方法である。(写真6)
- ・複数の形を組み合わせたり、形を鎖のようにつなげたりすることも面白い。(写真7)

●成形が完成したら、布やなめし革などで表面をきれいに整える

- ・表面を整えたら一応の完成である。(写真8)
《最後の仕上げとして磨いたり削ったりするのは扱いやすい生乾きの状態で行う。》

●作品を「生乾き」の状態にする

- ・触っても表面が凹まない程度の状態まで乾かす。いわゆる「生乾き」の状態である。また、できるだけ均質な状態になるように乾かすことが大切である。

《粘土の作品は「室^{むろ}」に入れてゆっくりと乾かすのがベストである。簡易的には、作品を段ボール箱にいれて乾かす方法がある。もっとも簡単な方法としては、適当に空気穴をあけたポリ袋の中に新聞紙と一緒に作品を入れて生乾きにするとよい。》

《粘土はゆっくりと時間をかけて乾燥させると粘土に含まれる水分量が均質になり、作品がゆがんだり割れたりしにくくなる。

特に粒子が細かい粘土を扱うときには、乾燥や焼成による割れを避けるための大切なポイントになる。》

●生乾きの状態にした作品を手になじむように表面を削ったり磨いたりする

- ・余分な形や微妙な凹凸は竹べらなどで削り取り、手になじむようにする。
- ・ナイフや彫刻刀などを使って削ったり鋭い切り込みを入れたりすることもできる。
- ・竹べらやスプーンの腹などで、心地よい手触りを味わえるまで粘土の表面をよく磨く。(写真9・10)

《表面をつぶすように竹べらの皮の部分やスプーンの腹の部分を使い、光沢が出るまで磨くようにする。》

- ・ザラザラした表面に仕上げることも触り心地のひとつである。

●乾燥後、無釉薬で約1000℃で焼成する

- ・完成した作品を日陰で十分に乾燥させる。
- ・ここでは粘土の塊を焼成するので、あぶりに十分時間をかけて水分をとばすようにする。具体的に1時間に100℃を上げ、400℃まで上げるのに4時間をかける要領である。以後は一般的な焼成方法でよい。



写真8



写真9



写真10

表現のバラエティ



写真11 完成作品 別角度から見た「作品A」〔約1000℃焼成／無釉〕（高さ約12cm）



写真12 完成作品 「作品B」〔約1000℃焼成／無釉〕（高さ約15cm）



写真13 完成作品 「作品C」〔約1000℃焼成／無釉〕（高さ約5cm）



写真14 完成作品 「作品D」〔約1000℃焼成／無釉〕（高さ約10cm）



写真15 完成作品 「作品E」〔約1000℃焼成／無釉〕（高さ約8cm）